



◆一関出張所管内を流れる東北地方で一番大きい北上川は、平泉文化が栄えた背景に深く関わっていたことをシリーズ化してご紹介しています。
北上川と共に生きた平泉文化 第7弾
 ー平泉文化を支えた母なる川・北上川ー

清衡はなぜ平泉を選んだのか

1100年頃、それまでの拠点・豊田館から平泉にやってきた

豊田館から平泉へ



豊田館（現奥州市江刺）

豊田館は、清衡の父・藤原経清が築いたとされ、清衡が幼少を過ごしていた所です。前九年の合戦で父・経清を失い、7歳だった清衡は母と共に、敵方である清原氏のもとに行きました。

清衡が28歳の時に後三年の合戦が起こり、その4年後、勝利をおさめた清衡は、この豊田館に帰り、平泉に移るまでの期間、拠点にしていたといわれています。

平泉に拠点を移した理由

清衡は、下のような理由から、北上川を重要な川と考え平泉を選んだ、とも考えられています。

流通面

以前、豊田館付近には北上川が流れていましたが、その流れが少しずつ西へと移動していったため、舟の航行ができなくなりました。平泉は、北上川の水量が多くて水深もあり、舟が航行しやすい場所でした。舟運に便利な所を本拠地にするには、流通によって勢力を拡大するために、とても大事な事だったのです。



交通面

平泉は東に北上川、北に衣川、南に太田川と、大小の川に囲まれ、中央を南から北へ、東北の幹道「奥大道」も通り抜けた要衝の地でした。



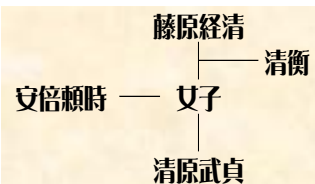
堤防で平泉の街を守る

江戸時代に想像で描かれた『平泉古図』によると、衣川と太田川は運河で結ばれていました。北上川沿いには堤防が造られ、平泉の街や人々の暮らしを守っていたという説もあります。

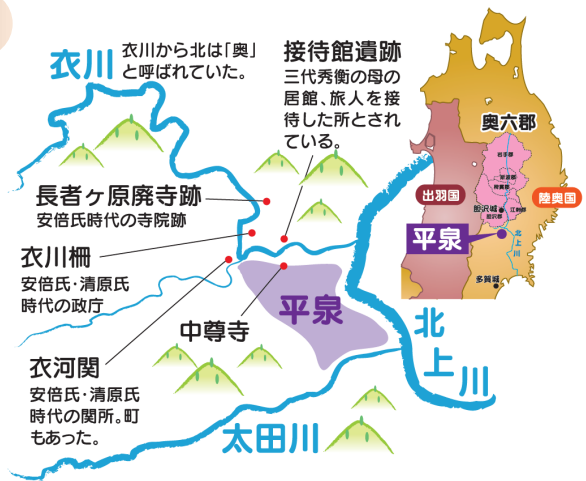
衣川の関わり

衣川は、境界の働きをしていました。それより北は「奥六群」と呼ばれ、鎮守府（胆沢城）という役所が管理し、衣川より南の陸奥国府（多賀城）が管理する地域と区別されていました。

奥六群の最南端である衣川の北部一帯には、清衡の祖父・安倍頼時の本拠があり、前九年の合戦の後には、清原氏の管轄となりました。



「頼時らは奥六群を支配したが、自分は衣川を越えて『みちのくの統治者』になる。」境界としての衣川は、清衡にとっても重要な意味を持っていたといえます。



※バックナンバーはこちら http://www.thr.mlit.go.jp/iwate/syuttouyoyu/itinoseki/2020/2020_ichinoseki.htm
 第1弾 NO.467 第2弾 NO.468 第3弾 NO.470 第4弾 NO.478 第5弾 NO.479 第6弾 NO.480

※北上川学習交流館 あいぼーと展示資料より